

## ■ 研修会「草木塔巡り」

10月5日(土)に研修会として米沢田沢地区の草木塔巡りを実施しました。

午前8時30分に白鷹町中央公民館前に集合し、下記のようなコースでした。

### 【午前】

米沢市田沢コミセン→塩地平草木塔→白夫平草木塔→戸長里草木塔→神原勝軍地蔵尊境内草木塔→大明神沢草木塔→道の駅(昼食)

### 【午後】

上中原草木塔→上屋敷草木塔→大代原草木塔→よねざわ昆虫館(三沢コミセン)→赤芝草木塔



参加者は全部で21人、田沢コミュニティセンターからは置賜民俗学会の梅津幸保会長さんに案内をいただき、予定通りに9基の江戸時代の草木塔を見学することが出来ました。

参加者の小杉もり子さんに感想を書いていたので、記載します。

### 米沢市田沢地区の草木塔巡りに参加して 小杉もり子

町史談会の文化財巡りは、秋日和の中、参加者21名、マイクロバスで10月5日午前8時30分役場前を出発する。

会長さんの挨拶、守谷英一先生より資料配付、日程と草木塔の知識をお話くださる。

最初の目的地の田沢コミュニティセンターに到着。歴史を語る草木塔の写真や木流しなどに関する史料、木の伐採に使ったノコギリなど資料が館内いっぱい。館長さんがお待ちになっていて、ご挨拶をいただく。案内してくださる梅津さんの講話をお聞きする。

草木塔は全国で160基が確認され、9割が山形県内に分布し、特に置賜地方に集中して存在する独特な石造文化財である。最も古いのは江戸中期(安永9年1790)に米沢市入田沢字塩地平に建立されたもの、江戸時代には34基が建立、うち32基が山形県内に建てられているとのこと。

草木塔が建立された背景のひとつといわれていることは、米沢藩の江戸屋敷が大火に見舞われ、類焼し、米沢藩では藩邸再建のため、田沢地区の御林から大量の用材を切り出し、江戸まで搬送したことがあるといわれていること。また、田沢地区の木流しは主に城下の薪を流していたのだが、山奥の伐採した木は冬期間に雪の斜面を滑らせて川辺まで運び、春に雪解け水で増水した流れを利用し、下流の中継基地まで流して積み上げておく。水かさの増す10月末が木流しの本番で、中継基地から最終目的地まで流れる木材を追って走り、本流から外れた木材があれば水中に飛び込み、本流に戻してやる。非常に危険で過酷な作業だったとのこと。

さらに、置賜地方の草木塔は、木流し衆の安全を願って建立され、そのために木流しの拠点に沿って分布しているという特徴があるのではないかということ。

説明を聞きながら、集落のあちこち9カ所の草木塔を巡りながら、思ったこと。たとえば塩地平の草木塔には屋根がかけられ、誠に立派であることを感じたように、それぞれの草木塔が日頃の手入れがされ、大切にされている。田沢地区が一体となり、草木塔を大切に守り管理し、祖先を敬うように地域の歴史を大切にしている。

杉の大木の前に四基ならぶ草木塔、草深い傾斜地に鎮座する草木塔、墓地の間近に、仏閣の傍らの草木塔、背丈を超える立派な草木塔。秋の光の下、道の辺に静かに、それぞれの歴史を語るように見える。秋風がさやかに草木塔をなでてゆく。

### 田沢地区からの用材運搬経路について 守谷英一

塩地平の草木塔のところで、明和9(1772)年の江戸大火に際し、田沢地区の用材が小樽川の木流しではなく、大峠を越えて会津から

阿賀野川で新潟の港に運ばれたことを梅津さんから伺った。参加者の今野正明さんがたいそう関心を持ってくださって、会津の方にお尋ねくださったところ、会北史談会の会報に寄せられた文章を送ってくださった。それを守谷がいただいたので、簡単に紹介したい。

いただいた文章で関係するものは下記の二つである。

1 「入田付峠越えの材木運搬」 川口芳昭  
平成21年『会北史談』第51号

2 「大悟山光徳寺山門の掲額」 菊地真洲男  
平成24年『会北史談』第54号

この二つの文章によると、塩地平からの経路は、塩地平→大峠→(会津領)→根小屋→入田付→喜多方→塩川→(阿賀野川へ)ということである。そして、入田付への道は、寛永4(1627)年以降の加藤時代から当時の会津松平家に至るまで通行が禁じられていたが、急遽補修して使用したということである。また、これは一回限りの臨時的な措置であったことなど、入田付村の文書や『会津藩家世実紀』などを検証して述べている。

詳しくは守谷が『置賜民俗』で紹介する予定であるが、米沢側の史料が少ないようなので、大変貴重なものである。今野さんに感謝したい。

## ■ 山口の十二の桜について (その2) 江口儀雄

前号からの続き

農民に限らず日本では死者は山中の常世に行って祖霊となり子孫を見守るといふ信仰があり、農民にとっての山の神の実体は祖霊であるといわれる。正月にやってくる年神も山の神と同一視される。また、山は農耕に欠かせない水の源であり、豊饒をもたらす神が遠くからやってくるという来訪神の信仰との関連もある。

山の神は醜女であるとする伝承もあり、自分より醜いものがあれば喜ぶとして、顔が醜いオコゼを山の神に供える習慣もある。狩人がこれを所持していると獲物を授かると信じている。マタギは古来よりオコゼの干物をお守りとして携帯したり、家に祀るなどしてきた。

「Y」の様な三又の樹木には神が宿っているとして伐採を禁じ、その木を御神体として祭る風習もある。三又の木が女性の下半身を連想させるからともいわれるが、三又の木はバランスが悪いため伐採時に事故を起こすことが多く、注意を喚起するためともいわれている。

山の神を女神とするところでは、この神は醜

い神で嫉妬深いため、山の神の祭りには女が参加することをきらい。女神であることから出産や月経の穢れを特に嫌うとされるほか、祭の日には女性の参加は許されなかった。

山の神の供物は桑(しとぎ)を供える例が多く山の神講をつくって祀る土地が少なくない。



十二の桜 2009

山口的那須家では刈り上げの日、当主が盛装して十二の桜にお詣りに行った。まだ夜が明けないうちに米をふかし、その米を搗いて小豆をかけたものをエチコに入れ十二の桜の洞に供えた。収穫を感謝してお詣りなのである。山の神そのものとしての信仰なのである。

十二の桜のところに十二堂というお堂があったと言われており、山口では薬師如来の脇侍である十二神将と混同している。高玉と長井市白兎の境にも十二堂があり、各地域に十二堂は散在している。この十二堂が山の神か十二神将なのか、まだわからなくしている。

病気、そして無病息災を祈願するのなら、十二の桜にはではなく直接薬師如来に行くべきなのである。

## ■ 瑞龍院の大般若経・その他のこと 丸川二男

正月が明けると間もなく、あちこちの寺で大般若会が始まる。ところで以前から気になっていた瑞龍院の大般若経をやっと拝見することができた。かつてあちこちのお経を見てまわった時は、西高玉地区のものがこの寺にあると思っていたが、お経は旧高玉村のもの六百巻を東高玉の円福寺と西高玉の瑞龍院で半分づつ持ち合い、大般若の時だけお互いにやりとりしていたということを最近になって知った。寺の宗旨は異なるが「村大般若」という考え方からすれば特別のことではなかったのである。

だが、瑞龍院はほかよりも大きな寺であるだけにそれだけではなかった。やはり寺独自に求

めた六百巻のお経があったのである。それも古くなって傷みが激しく、一部はバラバラになっていたものもあったという。それをどういう縁か、西根・川原沢の鈴木市三郎という人が昼飯を持って毎日、自転車ですりに通いお経の修理してくれたので寺では感謝状を贈ったのだという。

この話は地区のそこそこの人が知っていることだというが、話はそれだけではなかった。直し終わったお経を数えたら八巻足りなかったので、市三郎はその八巻を自ら書いて寺に納めたというのである。その不足の八巻がどんな状態だったのか、寺と市三郎はどんな関係だったのかはいまのところ不明である。

更に市三郎はヒマをみては自らペンで六百巻の大般若経を書写したものがあり、それは後に寺から請われたこともあり、市三郎が亡くなった後に「このまま家に置いておいても・・・」と考えて寺に納めたという。冊子のように綴られた市三郎の六百冊の大般若経は、今も寺の本堂の書架に保管されているが、仔細は中の書き込みを含めて今後の調査が必要であろう。この市三郎という人は毎朝四時に起きて般若心経一枚を描き、仕事をするという生活を三年余り続けて、一千枚の写経をしたという。そのほかにも「南無阿弥陀物仏」の六字名号を一枚の紙に二千字。百万遍、書いたものもあると聞く。

酒・タバコだけでなくお茶も、飲まない人だったというが、そのせいか九十歳まで生きたというのである。本人の意思や精神力もさることながら、支えた家族も並みの苦労ではなかったに違いない。先ごろ市三郎の身近な人から直にその話を聞いて、ただ「参った」という言葉しか出てこなかった。

また瑞龍院には明治三十七年建立された叱枳尼尊天がある。この正面の扁額は「従一位侯爵源通人謹書」とあるとおり、これは旧華族の久我通久（こがみちひさ）のことで、元をたどれば村上天皇までつながっている家系でまさに「源（みなもと）」の直系である。この公卿の血筋は曹洞宗を開いた道元のほかに、近年は女優の久我美子（くがよしこ）が出ていることでも知られている。だが、この寺とどうつながるのだろうか。

この本殿の周囲を飾っている手のこんだ彫刻は「山形住 関 正」という彫工によるもので、地域性と時代を合わせて考えると、十王塩田の行屋の仏像群に関わった新海竹蔵・竹太郎と何らかの接点が考えられなくもない。山形には伝統産業としての山形仏壇があり、その細工とどこかでつながっている可能性も否定できないからである。

さらに通称「下のお稲荷様」と呼んでいる西高玉の稲荷神社には、草岡の尾形（小片）次郎左衛門行房という刀鍛冶が嘉永七年に奉納した刀剣がある。しかし、この刀鍛冶については師匠が誰で、修行はどこでしたのか、材料の入手経路はどこかなど、不明な事が多い。形の整った刀剣であるだけに、今となると調査の時期を逸したのかもしれない。

草岡の尾形家は千六百年代の慶長年間から刀鍛冶と野鍛冶を継承してきた家で、宗正、宗昌、行秀、宗行、行房などの名前が二百五十年ほどの間に世襲を繰り返してきたらしいことのほか、刀鍛冶の秘伝を伝える文書は残っているものの、それ以外に人物の周辺を書き留めた文書も伝承も伝わっていないという。ただ、最近になって刀鍛冶の師として「赤間綱信」や「水心子正秀」という名前が浮かびあがってきているというから、まだ可能性は皆無ではないのかもしれない。

### ■ 布に関わる様々な植物のこと（3） 守谷英一

白鷹高等専修学校へ行ったとき、黒澤和子先生に十王の南波さんの蔵から出たという藍玉を見せていただいた。素人目には土の塊のようで、これが染料であるとは教えてもらわないとわからなかった。

米沢地方でアイ（藍）の栽培が奨励されたのは鷹山の時代で、しかし、それも産物になるほど成功はしなかったようだから、南波家に残っていた藍玉は、他所から持ち込まれたものだろうと思われる。いつ頃の時代のものか、詳しくは聞いてこなかったが、古いものであろうことは想像できる。

さて、アイといえば阿波国（徳島県）である。しかし、アイ栽培農家は年々少なくなって、徳島新聞の記事によると、現在は2011年度で33戸、藍玉の原料となる「すくも」の生産が38トンとなってしまっているとのことである。

アイは戦中の食糧増産政策により禁止作物とされ、栽培ができなくなってしまった。その年のアイから種を取り、次の年に植え付けなければ発芽率の落ちる植物という。常に栽培し続けなければならないものだという。だから、一時国産のアイがなくなる危機があった。そのとき、憲兵の目を盗んで、山の畑で種を採るためだけ栽培し続けたのは藍の製造をしていた佐藤平助という人だったという。命がけで守った種の子孫が現在のアイということになる。

同様なことは、山形の最上紅花でも起こって

いる。明治時代に中国四川省の紅花の輸入や化学染料アニリン普及により、明治10年ごろには産業としての紅花はほぼ消滅してしまっていたが、伊勢神宮や明治神宮という特殊な需要によって生産が継続されていたが、アイの場合と同じように戦中に禁止作物になったため、完全に姿を消してしまう。戦後になって、山形市出羽地区の農家が一握りの種子を発見し、それから発芽させたものの子孫が現在の最上紅花である。

戦争はそのような形で伝統文化を破壊するものである。具体的に兵器で破壊するだけではないことをアイやベニバナの歴史は教えている。

現在、また別な力が伝統文化を消滅の危機に追い込んでいることを最近知った。それは、もしかしたら戦争による文化破壊よりも深刻かもしれない。

小松織物工房を訪問した時、原料となる糸のことを聞いた。現在の生糸は中国やブラジルから入ってくるものが多いという。国産の生糸はごく少なくなってしまったという。確かに、白鷹町の養蚕農家は今年でなくなってしまった。それも経営ということを考えれば仕方のないことでもなろう。しかし、伝統的な織物には良質の糸が必要である。現在はブラジル産のものがよいと小松さんは教えてくれた。けれども値段が上がりすぎると、小さな織物屋では買うことができなくなる。それも経営の問題だ。

現在話題になっているTPPは自由競争が基本である。農作物もその対象になっているが、当然、生糸なども対象になるのだろう。そのことによって、良質のものが安価に手に入れられればよいが、過大な競争によってより高価になったのでは資本力の弱い伝統織物は立ちゆかなくなるだろう。難しい問題である。

## ■ お知らせ、その他

○「白鷹丘陵の歴史と文化・フォーラム」の案内(再掲)

平成25年11月9日(土)に荒砥地区公民館で上記のフォーラムが開催されます。今回は、本会も協力して白鷹町で開催することになりました。メインテーマは「白鷹丘陵周辺の古墳(仮題)」ということです。白鷹町には古墳はないものだと思っておりましたが、廻り屋遺跡からは「方形周溝墓」というものが発掘されているそうです。このフォーラムは「山辺町郷土史研究会」「上山郷土史研究会」「本沢郷土研究会」「中山町郷土史研究会」「西山形郷土史研究会」「朝日郷土史研究会」「村山民俗学会」「山形市郷土史研究会」が参加している会です。

当日はそれぞれの会の方々の研究発表も行われます。また、交流会も予定されているようです。会員の皆さんのご協力と御参加をお願いします。

期日 11月9日(土)  
午前9時受付開始 9時30分開会  
午後の部午後1時開会  
会場 荒砥地区公民館  
参加費 500円(昼食代等別)  
参加申込み・問い合わせ 江口儀雄  
080-1801-5367

○伊勢参りに行ってきました

10月24、25日と1泊2日で伊勢参りに行ってきました。中学の同窓会をかねて東京駅で合流したメンバーも含めて一行27名です。ちょうど式年遷宮ということもあり、新旧両方の建物を見ることができました。



新外宮外観

さて、現在は1泊2日での参拝が可能になっています。それも新幹線のおかげということができるでしょう。日帰りは可能なのか、インターネットで調べてみました。うまくやれば可能かもしれません。交通機関の発達はすごいものです。

江戸時代はどのぐらいかかったものなのか、何か手がかりはないかと思ひ、『白鷹町史』を見てみました。890ページに「抜参り」の記述があり、70日ぐらいと記されていました。さぞかしお金もかかったものだったろうと想像されます。

したがって、「伊勢参拝無尽」などの無尽講が作られ、代表が行くということもあったようです。また、伊勢うどんという「コシ」のうどんも有名ですが、それは長旅に疲れたところに消化のよい食べ物をということで生まれたようです(これはバスガイドさんが教えてくれました)。

昔の方が時間もかかり、自分の身体が頼りという大変な面もあったのですが、70日にもわたる旅は優雅であったし、大がかりな娯楽でもあったように思います。(守谷)